

長崎県産のクワズイモ (2024年続報)

井 口 恵一朗¹⁾*Alocasia odora* growing wild in Nagasaki Prefecture
(update in 2024)Kei'ichiro IGUCHI¹⁾

長崎県南部の道路脇を眺めていると、濃緑の大きな葉を広げたクワズイモ *Alocasia odora* に出くわすことがある (井口 2022)。日本国内における本種の生息地はおおむね亜熱帯圏に限定され、実際に南西諸島の島々では野生の姿をふつうに目にすることができる。温帯域に含まれる長崎県は、クワズイモ本来の分布の縁辺部をさらに北側に外れた緯度範囲に位置する。ゆえに、長崎県産クワズイモの出处を考える際に、園芸種が逸失して自然条件下で生育しているという説明がもっともらしく聞こえるかもしれない。しかし、人家から遠く離れた場所に本種が出現しているという事実は、逸失説とは異なる出自の可能性を示し

ている。すなわち、近年の気候変動が分布範囲の北上を許容促進するというシナリオが推定される。2022年2月27日の前回観察時から2年余りの時間が経過するあいだに、長崎県下の温暖化は確実に進行し、とりわけ夏季には連日の記録的な猛暑を経験するようになった。本稿では、既報のクワズイモ3株に新たに発見した3株を加えて、2024年9月10日の観察に基づいて、長崎県産クワズイモの近況について報告する。

前報で記載した3ヶ所 (図1: 地点①~③) のクワズイモ群落は、2年後の現在においてもそれぞれ枯死することなく存続していた。国道207号線沿い岡郷内 (地点①: 32.87°N/129.89°E) の群落は分株を繰り返して、規模を拡張して繁茂していた。複数の花穂の先端には、未開花の蕾のほかに真っ赤な種子の結実が認められた。地点①から国道に沿って1 km ほど離れた場所 (地点②: 32.88°N/129.88°E) に自生する群落では、肥大した根茎から伸びた花穂には蕾とともに

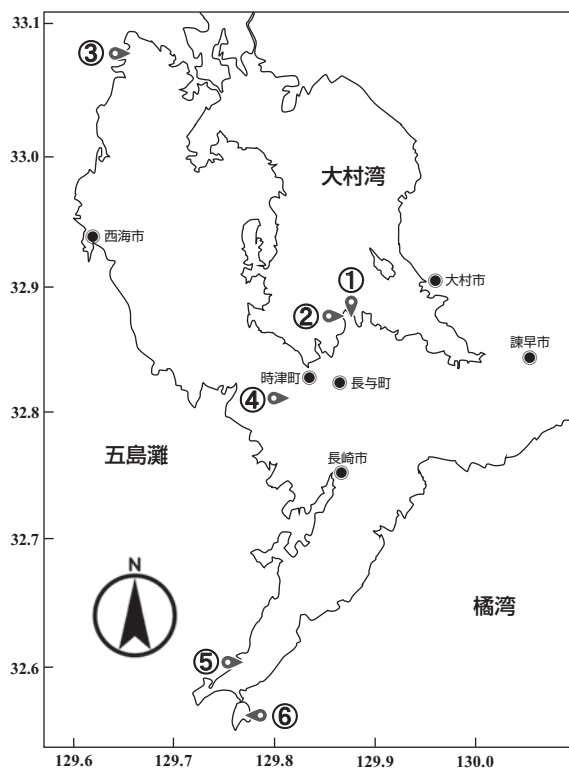
図1. クワズイモ *Alocasia odora* の生息地点図2. 地点②におけるクワズイモ *Alocasia odora* の結実した花穂¹⁾ 〒852-8521 長崎市文教町1-14 長崎大学環境科学部



図3. 地点⑥におけるクワズイモ *Alocasia odora* の群落

熟した種子が認められた(図2)。国道202号線沿いの西海市面高郷の路傍(地点③: 33.08°N/129.68°E)の群落では、ここ2年間の冬枯れはなかったものの、株の一部に破損の痕跡が認められた。草刈の際に、切り取られたのかもしれない。ここでも、花穂の先に未開花の蕾が認められた。

前回の報告以降、次の3ヶ所(図1: 地点④~⑥)で新たなクワズイモ群落に遭遇する機会を得た。国道206号線沿いの時津の「鯖くさらかし岩」近傍(地点④: 32.82°N/129.85°E)の群落では、未開花の花穂の伸長が確認された。国道499号線沿いの長崎市高浜町の道路脇の斜面地(地点⑤: 32.60°N/129.78°E)では、大小10数株からなる規模の大きな群落が見出された。複数の株から未開花の花穂が確認された。長崎市樺島の林道脇の林床(地点⑥: 32.60°N/129.78°E)

では、発育段階の異なる複数の株が間隔をあけて散在していた(図3)。大型の株からは未開花の花穂が確認された。

今回調べることできた6群落において、冬枯れの残痕は認められず、順調な冬越しの様子が推察された。また、従来は長崎県下では見つけ出すのが難しかった花穂についても、調査した6つの群落の全てにおいて未開花の蕾が確認され、そのうちの2群落では先端に熟した種子を付けた花穂が見出された。地点②で採取した種子を用いて、実生栽培を試みた。花穂あたり全部で30粒の種子の大きさにはバラツキがあり、大きな種子からの24粒を選んで一晩水に浸したのちに、種皮を取り除いた。室温条件下の播種(2024年9月11日)から21日経過後にようやく最初の発芽に至り、40日経過した時点で発芽率は80%を超えた。赤いクワズイモの実を摂餌した鳥類には、種子分散の働きが期待される。糞とともに地上に落とされた種子はやがて発芽し、成長を保障する環境条件が整っていれば、新天地における実生繁殖が見込まれる。この先、クワズイモの結実が常態化するようになると、本格的な野生定着が現実味を帯びる。温暖化傾向の継続は、クワズイモの分布拡大に貢献するものと予想される。

文 献

井口恵一朗 2022. 長崎県下に自生するクワズイモの由来に関する試論. 長崎県生物学会誌. 90: 16-19